

認知症のある義母が最期まで自分らしく暮らし続けた軌跡
～家族の向き合い方・社会資源の活用等～

中 川 千 代

実践報告

認知症のある義母が最期まで自分らしく暮らし続けた軌跡
～家族の向き合い方・社会資源の活用等～

中 川 千 代

はじめに

2024（令和6）年5月8日付朝日新聞記事によると65歳以上の高齢者のうち、認知症の人が443万人（12.3%）になるという2022年時点の推計を、厚生労働省が8日公表したとある。認知症の前段階である「軽度認知障害（MCI）」の人は同じく558万人（15.5%）を見込む。

2060年時点では、認知症の人は645万人（17.7%）に増え、およそ6人に1人となる見通しである。MCIも632万人（17.4%）まで増加すると見込まれ、認知症とMCIをあわせると、およそ3人に1人が認知機能にかかわる症状があることになる。認知症は、その家族を含めると身近な誰にでも起こりうる脳の障害であるといえるのだ。

筆者は、認知症がまだ「痴呆症」と呼ばれた昭和の終わり頃から長年介護現場で実践を積み認知症のある人々と生活をともにしてきた。認知症のある人に対して、どのように接しどのような声をかけどのような行動をとれば穏やかに過ごしていただけるのか、正解はひとつではない。自身も失敗を繰り返しながら、他の職員や家族の対応をみて学ばせていただくことも多かった。認知症という一括りでは語れない様々なケースを体験させていただいた。当然、認知症のある一人ひとりの人間の考え方、価値観、生き方、認知症の進行状況を理解したうえでの対応、コミュニケーションが介護にかかわる専門職には求められる。

筆者はその経験によって磨いた知識・技術を義母（Mさん）に活かせる時が訪れた。一職員が利用者やその家族と接するのは、また異なる面がある。試行錯誤を繰り返しながらも義母は最期まで通所介護を利用しながら自宅でひとり暮らしを貫くことができた、今改めて感じている。親から譲り受けた自宅を守っていくことに使命を感じている人だった。義母の生き方、思いを尊重しつつ地域に受け入れてもらい過ごすのは非常に難しい。彼女の強い信念と認知症の進行に家族が葛藤しながら向き合い、社会資源を最大限に活用しながらその生き方を尊重し、ぎりぎりのところまでひとり暮らしを選択した。家族だけで抱え込まなかったことが、晩年彼女がひとり暮らしを貫くことに至れた大きな要因といえそうだ。その義母の軌跡をたどり振り返り整理し、本実践報告をまとめることで、今後、認知症のある人の介護に携わる方々の一助となればありがたい。義母は小学校で長年勤めた教育者であり教育と人材育成に対する思いは強い人だった。

倫理的配慮としては、本実践報告を公表するにあたりMさんの長男（筆者の夫）を含む

生存している関係親族の了解を得ている。個人情報を守るため大勢に影響のない範囲で事実を脚色している部分がある。また、高田短期大学研究倫理委員会の承認（高短研審第 24-1 号）を得ている。

1. M さんの基本情報と生育歴

M さんは、1932（昭和 7）年 6 月生まれ。T 市にて地主で呉服問屋の家に孫娘として生まれ育ち、幼少期は裕福な生活をしており自宅に女中がいて家事一般を担ってもらっていた。その環境で育った M さんは料理や裁縫など一般的に女性が得意とする家事が要領よくこなせないようであった。たとえば、煮物を作っても柔らかく煮ることができず味がしみこまない。味噌汁を作っているときは、ずっと鍋の前に立っていて要領よく動けないといった様子である。

M さんが 10 代の頃に戦後の農地改革などの影響を受け家が傾く。生活が厳しくなった。M さん自身は、その当時非常に苦労したと話していた。

M さんは二人姉妹の長女で、女学校と師範学校を卒業後定年になるまで約 40 年間小学校教員として勤めた。20 代の頃、養子縁組にて婿養子を迎えた。子どもは長男・二男の二人。夫婦仲は良いとは言えなかったが現役中はお互いに我慢して夫の定年退職直後（1991 年：M さんが 59 歳の頃）熟年離婚した。その後夫は旧姓に戻り、さまざまな事情でその二男（その当時未婚）も別れた夫の姓を名乗るようになった。M さんは我が子である二男のことを M さんなりに気にしていたが、二男側の事情により情報が途絶え、二男とは交流することができなかった。2007（平成 19）年 5 月二男の結婚式で再会したのみで、それ以降も会うことも話すこともない状況であった。筆者やその夫（M さんの長男）は、二男とは交流があり私たちを通して M さんの様子は二男には伝わっていた。

筆者が M さんの息子と結婚した当初 M さんはまだ離婚していなかった。筆者たちの仕事の関係で M さん夫婦の家から 40km ほど離れて生活していた。子どもが小さい頃たまに M さん夫婦宅を訪れる際は水筒にお茶を入れて持参した。それは、M さんに食事を食べながらお茶を飲む習慣がなく、電気ポットがなく食後にお湯を沸かし始めてお茶を入れるために、乳幼児が飲める温度のお茶になるまでには相当時間がかかったからである。冷蔵庫に冷たいお茶をストックする習慣もなくこちらがそれを望んでいることに気づくこともなかった。M さん夫婦は、筆者が第 2 子を出産する前に離婚した。M さんは自身が独身の頃から住んでいた家（M さんの両親が健在のときに戦後建てた自宅）でひとり暮らしすることとなった。

M さんは筆者の子ども二人を私が勤務している間、子育てしてくれた。筆者の二男の育児休暇明けから 5 年間くらいは本当にお世話になった。その当時、M さんの自宅と筆者の家は自転車ですら 10 分程度の距離だった。M さんには運転免許はなく自転車しか乗れなかった。幼稚園頃までは、私も夜勤をしていた関係もあり夜もこちらに泊まって来て私が「休

日」のときだけ自宅に戻っていった。子どもたちが小学生の高学年くらいになると夜は泊まらず、週に何度かこちらに来てくれるようになり、中学生になるともう用事がないと言いこちらには来なくなった。時々、こちらに呼んで一緒にお鍋を囲んだり、カレーライスを食べたりすることを喜んでくれた。「ひとりではお鍋ができない。ひとりではカレーは余る。」などよく言っていた。年末年始は何泊かこちらに泊まってくれた。それ以外は誘っても自転車で10分離れている家に帰っていった。こちらの家で食事をするたび「これはあなたの手作りか」というのがMさんの口癖だった。お鍋は、今は鍋の素がありいろいろな具材を入れて煮たらよだけなのでこちらからしたら楽な料理なのだが、たぶんMさんは自分で作ったことがなくチャレンジしにくい料理だったのだろうと推測する。

Mさんが得意なものは「卵のサンドイッチ」だった。よく作ってくれた。サンドイッチの具は必ず卵のみだった。筆者の子どもが幼稚園の頃、野菜なども一緒に食べられるからという理由でレタスやきゅうりを入れたらどうだろうかと提案したが受け入れてもらえず、Mさんは卵のサンドイッチを作り続けた。ある日、筆者の長男が小学校に入り授業参観に出向いた時、子どもの友達のお母さんから話があった。「Mさんから電話をいただき『卵のサンドイッチを作ったから取りに来てください』ということで下の子どもの手を引いて雨の中、歩いていただきに行きました。」と少し迷惑そうな話ぶりだった。その方の家は1km以上距離があった。雨でなかったら良かったかもしれないが、こちらの好意が相手にとってうれしくないこともあるということをMさんに伝えたが全く理解してもらえなかった。

とにかく、Mさんはプライドが高かった。その上、認知症になる前から一般的な知識が欠けているところがあった。たとえば、誰にでも得意不得意はあるかもしれないが、銀行のATMが使えなかった。キャッシュカードは作ったことがなかった。ビデオの再生や音楽を流すなど機械の操作が苦手だった。何かおかしなことになっていると必ず子どもたちのせいになった。洗濯の際、柔軟剤を使用するがその存在を知らなかった。新居の水道の蛇口の操作を「教えてもらっていないからできない」と言った。Mさんは、文章を書いたりするのは得意で達筆だった。でも達筆すぎて行書をさらに崩したような文字で書いてくれるため、電話の伝言メモがしてくれてあっても何が書いてあるのか理解できない。それを尋ねると「そこに書いてある通りや」と言われ口頭で伝えてくれないということが度々あった。プライドの高さ以外にコミュニケーションの不得意なところもあったのであろう。

Mさんは、ある国際交流団体の事業で外国人の方に日本語（平仮名、片仮名、簡単な漢字など）を教えるボランティアを続けていた。その場所が自宅から近かったこともあり通所介護を利用するようになってからも積極的に出かけていた。晩年は、かえって迷惑をかけることもあったようだったが、明確に断られたわけではないが徐々に通所介護の比重が高くなっていった。

Mさんは、2017（平成29）年4月（84歳）に左手首を骨折して以来、骨粗鬆症を改善する薬を服用していた。2019（平成31）年2月、間質性肺炎・肺線維症、また、心房細動

と診断され、肺線維症については経過観察、イグザレルト錠 10mg（血液を固まりにくくし脳卒中や塞栓症を予防する）を処方された。そして、脳内の過剰な興奮性の神経伝達を抑え、脳神経を保護することで、アルツハイマー型認知症の症状が進むのをおさえるメマリー錠 10mg も服用していた。

2. 認知症の進行に伴う生活状況の経過

地域の老人会の集まりには、積極的に参加していた。しかし、2012（平成 24）年（M さん 80 歳）頃あたりから、いつ、何時にそれが開催されるのかが曖昧になってきて、夜の 10 時を過ぎてからや、早朝 5 時頃などでも近所の関係者のお宅に訪ねて行って確認するなどの行動がみられるようになった。また、会合には綴ったものを持参していたようだが、必要な情報にいきつくことができず戸惑っている様子がみられると老人会婦人部の部長さんから話があった。ものを大切に性格の M さんなので仕方がないが、グランドゴルフの用具をずっと借りていて、他の方々はある程度の期間を過ぎたら購入して自前の用具を使うが、M さんは今でも借り続けているということも話された。M さん側の理由として「私が借り続けることによって、初心者の人が始めやすく初めから用具を購入して出費しなくても気軽にできるようにと考えているんさ。」と息子に語ったようである。婦人部の部長さんから一度うまく本人に話して、病院に認知症の検査に連れて行ってくれるというありがたいお話もあった。本当にありがたいことである。というのは周りの家族の話は聞き入れないタイプなので息子が勧めても納得してもらえないはずもなく、妹の意見も聞かないのが M さんだったからである。認知症の診断を受けるための受診につなげることは容易ではないことが明白だった。はっきり覚えていないが、その結果は外来で通院しなければならぬほどではないという見立てだったように記憶している。この時点で認知症の前段階である「軽度認知障害（MCI）」程度の生活上の困り事があっただろうと筆者は当時を振り返って感じている。

ある時、M さんが久しぶりに「卵のサンドイッチ」を作ったと朝から自転車で持ってきてくれた。かなり久しぶりだった。M さんが 80 歳くらい（2012 年前後）の頃のことで。子どもたちが幼稚園、小学生の頃よく作ってくれた例のサンドイッチだ。まず、私が一口食べたがいつもと違う味がした。一切れの半分ぐらい食べたとき筆者の息子が起きてきたので勧めた。息子は一口食べて「これはあかん」と言って吐き出した。石けんのような味がした。すでに自宅に戻っていた M さんに筆者の夫が電話して尋ねると「卵やパンは今日買ったものや。全部今から持っていく」と返事があり、再び持ってきてくれた。確かに卵やパンは前日に購入したものようであったが、マーガリンは箱の賞味期限が 5 年前であり蓋を開けるとマーガリンの表面がピンク色になっていた。そのことを見せて尋ねると「これは古くない。食べられる。今から検査所（保健所のことか）に持って行って調べてもらう」と声を荒げて返答した。筆者の夫がマーガリンを持って帰らさずこちらで預かること

にした。持って帰ると再び使用することが容易に想像できたからである。筆者は結局、その後数回下痢をした。その程度で済んだ。下痢をしたことについて別件で電話した際に伝えたが謝ることはなかった。この一件がMさんのなかで消化しきれず、良いことをしたのに嫁に非難されたと理解したようで、隣町に住んでいる妹に話したらしく、翌日妹が訪ねてきた。事情を話すと妹には納得してもらえた。数日後、Mさんは筆者の家を突然訪れ、玄関先の土間に土下座して「もう二度とこの家には上がらせてもらえないことをした」と言った。筆者はこんな謝り方をされたくなかった。しかし、「まあ、そんなことは言わずにあがってください。」と感情を抑えて部屋に招き入れ小1時間ほど話す笑顔で帰っていった。その後は、土下座したことも、古いマーガリンのことも忘れたかのようにそれ以前と同じような生活に戻った。都合の悪いことに蓋をしているのか、認知症が進んできて覚えていないのかが判断がつかなかった。少なくとも、徐々に認知症が進んできていることは明らかだった。

その頃から、自宅を出て自転車で約10分の筆者の家に「今から行くわ」と連絡がきて、なかなか到着せず心配していたら、かなり遠くまで行き過ぎていて誰かに教えてもらったのか、なんとかたどり着くことができたこともあった。また、自転車で墓参りに行くと出かけて方向がわからなくなってしまい、日が暮れてきて本人がようよう困り近くの家に助けを求め、持参していた携帯電話を使ってその家の方から連絡がこちらに入り迎えに行ったこともあった（自転車で50分くらいかかるところに行ってしまう）。Mさんはそのことを長男から注意されると「自転車を川に捨ててくれ」と捨て台詞を言って、長男を困らせた。そもそも携帯電話を使用するようになるまでも、なってからも家族は大変であった。電源の入れ方、切り方が理解できない。着信がわからない。マナーモードが理解できない。ハンズフリーで電話していた様子を見て携帯電話は耳に当てなくても通じると解釈してしまいしゃべっているので、お互いの声が聞こえないなどの携帯電話の初歩的な使用方法の未習得によりMさん自身も戸惑っていた。「ちょっとおかしいで、来て」と長男は何度も固定電話で呼び出されていた。親子であるがゆえに、お互いが感情的になり声を荒げることが多かったが血縁関係で強く結ばれたもの同士は信頼が厚いと感じられた。

長男（筆者の夫）は、Mさんの対応に疲弊していたが、直接必要なやりとりは率先して担ってくれた。Mさんが地元の小学校が会場に夜に行われる会議にどうしても出席したいと頼むため本人のいう時間に車で送っていくと時間を勘違いしておりすでに終了していることもあった。健康保険証を失くした時も、長男は市役所に行って再発行の手続きをしてくれた。しかし、運転免許証を持っていないMさんの本人確認の作業は手間がかかった。やっと、本人のところに健康保険証が届き安心したのもつかの間で、その後早い時期に再び健康保険証を失くした。その時はMさんが自力で市役所に行き簡単に再発行できた。Mさんは、想像以上にきちんと行動できる時があるが、必要な物の管理ができないことや約束の時間を忘れてたりすることが目立ってきた。その後は、長男が健康保険証を預かるこ

とになった。このころはMさんが自分で銀行に行きお金を引き出そうとした際、通帳や印鑑の不備が原因で長男のところへ電話がかかってくることも度々あった。薬の管理について、長男がお薬カレンダーを作成しMさんが毎朝自力で飲めるように事前に準備していた。主治医からはイグザレルト錠に関しては定期的に同じ時間帯に飲んだ方が良いこと、飲み忘れは1日くらいならよいが飲み過ぎは避けたほうが良いことなどを助言いただき本人に何度も伝えた。この時点では食事ができていないとか、身体の臭いが気になるということではなかった。

2016（平成28）年後半頃になると（Mさん84歳）、入浴や衣類交換が満足にできていないようになってきたため、定期的に筆者の家に連れてきて入浴してもらった。ところが、いくら声をかけても同じ服を着て帰るため、専門家への依頼の必要性がでてきた。ひとり暮らしであったため地域包括支援センターの職員がたまに訪問してくれていた。要介護認定を受ける必要があったため、包括支援センターの職員と相談しMさんには「今、ひとり暮らしの人の家を一軒一軒回り、健康チェックをさせてもらっている」と説明してもらい訪問者に不信感を感じながらも認定を受けることに成功した（2017年1月末）。後日、筆者がMさんの家に行くと包括支援センターの職員の名刺がくしゃくしゃにまるめて畳に捨ててあったので、歓迎はしていなかったようであったと感じられた。認定結果は「要介護1」であった。こちら側の思いとしては、週1回それが難しければ月2回でもよいので「通所介護」を利用できるようになり、入浴の機会を確保したかった。Mさんの自宅から比較的近く、家庭的な雰囲気のある事業所を選びMさんには「介護が必要な人の話し相手のボランティア」に行ってもらえないかと事業所のケアマネジャーと一緒にお願いして「お試し」をした。「お試し」後、実際の利用日（Mさんにとってはボランティア）を本人と相談の上決めた。その当日の朝、Mさんは鉛筆書きの長文のお断り文を書き、通所介護を受ける予定の事業所と筆者の家の郵便受けにその手紙を入れて断るという行動にでた。Mさんが小学校教員時代に家庭訪問に行っていた地区にあった事業所だったので土地勘があったようである。通所介護利用は、失敗に終わった。

2017（平成29）年4月24日、自宅内で転倒し、左手首を骨折する。N病院に1泊入院にて手術を行うこととなる。術後、ギプス固定後サポーターのはめ方を何度説明しても理解できず、自分の好きなようにはめていたが何とか治癒した。

その一泊入院日、自宅にいない機会を利用し、息子（筆者の夫）が前々から気になっていた冷蔵庫の中身をチェックし、賞味期限が1995年のウスターソースを始め15年ほど前の鯛めしの素、同じく知人等からいただいたお土産の漬物やパック入りのハムなど10年以上前の賞味期限の未開封の食べ物が多量にあり、それらをすべて処分し冷蔵庫内の汚れを掃除した。Mさん本人が、戻ってきて「勝手なことをした」と興奮して怒るのではないかと筆者の夫と私は予測したがその予測は良い方向にはずれ、冷蔵庫内がすっきり片付いていることに関しては素直に受け入れてくれた。その後は、台所に置いてあるさまざまな怪

しい食材等を筆者が少しずつ処分してかたづけた。

3. 通所介護利用開始後の変化

筆者が介護福祉士養成校に勤務していることから介護実習施設とのつながりがあり、デイサービスセンターHを運営している施設の管理者（実習指導者）と打ち合わせをしている際、Mさんの話になった。すると、筆者の考えの中に想定されていなかったこの施設をMさんの利用につなげられないかと提案していただき、その日をきっかけに通所介護利用に向けての本人への働きかけを計画した。

2017（平成29）年8月21日（Mさん85歳）、デイサービスセンターH利用開始となった。Mさんの自宅との距離は、車で15分程度であり、土地勘はなく自動車での送迎がなければ行けない場所だ。あくまでも本人は、ボランティアとしてデイサービスセンターHへ行っているつもりであり、そのお礼として車での送迎や入浴、昼食サービスが無料で提供されると信じていた。関係者とのやりとりは、長男（筆者の夫）が中心に行い、筆者も補助的にかかわった。長男にとってMさんは実母であり、長男は真面目で何事もまっすぐに受け止める性格である。施設職員やケアマネジャーから伝えられる内容の理解が少しズレていることもあった。初めの頃は伝達内容も多く、分野の違うことに関して用語の意味の理解などのちょっとした受け取り方の違いは生じるのは仕方がない。筆者は介護施設での勤務経験もあることから、Mさんの家族ではあるものの受け入れ側の施設職員の思いもある程度理解できる立場であった。Mさんの利用の仕方や対応方法については、「本人が気持ちよく利用できること、できるだけ利用回数が増える方向に向かうこと、認知症の進行を緩やかにできるような活動を行うこと」など結果的に在宅生活を継続しながら清潔保持ができ認知症進行予防になることを目標に詳細を練っていった。そのなかで筆者の夫の思いが施設職員やケアマネジャーに伝わりにくい時などは、筆者が言葉を変えて妥協できる範囲や内容を説明したりした。

Mさんは、利用し始めた頃は帰りの車のなかで「もう二度と行きたくない」などの厳しい言葉を何度も施設職員に言っていた様子だった。職員が迎えに行くところかに出かけていて会えない状況（たぶん近所にある観音さんにお参りにいっている場合など）や、「今日は用事がある」と断られ、利用につなげられない日もあった。本人は「第1第3の月曜日のみでよい、木曜日は書道教室があるので来られない」と職員にきっぱり言うこともあった。粘り強く職員たちはMさんの気持ちを汲み取りながら次回の約束を本人と行い、電話で確認をとりながら利用日数が1回でも増えるようかかわり続けてくれた。実際に施設にいる間は、施設のタオルやエプロンをたたむなどの作業、ラジオ体操、口腔体操、園内散歩、簡単なゲーム、折り紙製作、施設の行事参加など積極的に活動している様子だった。

Mさんも徐々に慣れていき3ヶ月ほどすると、朝のお迎え時「待ちかねとったわ。たくさん身体を動かすと帰ってからスッキリするわ。」と職員に話すこともあったらしい。こ

のようにして、1ヶ月に4～6回の利用が基本となった。

Mさんが「ボランティア」としてデイサービスセンターHを利用しているという気持ちを持ち続けられるように、利用料金の支払いは長男が行い、毎日の連絡ノートはFAXで筆者の家に送付してもらった。それ以外に、電話等で施設と連絡を密に行った。広報誌にはMさんの顔写真は掲載されないように依頼した。

Mさんは自宅に二層式の洗濯機があった。しかし、下着等の手洗いはしていただろうが洗濯機を使用している様子はこの頃はほとんどなかった。筆者の家で入浴してもらっても衣類は交換する様子がないことから、どのようにすれば衣類を清潔に保てるのかを施設職員と案を練った。「ボランティア」専用の服装（ピンク系の上着と黒ズボン）を施設に3セットほど預け、施設に到着した際にその服をボランティアのユニフォームとして着替えてもらい、その間に本人が着てきた服を洗濯していただきその日施設から帰る時間までに乾かして、その乾かした服を着て家にもどる。下着はリハビリ用紙パンツを着用する。洗剤はこちらで購入して預ける。この案は、本人が受け入れやすくうまくいった。施設職員には、手間をかけていただいた。「ボランティア」専用のユニフォーム（ピンク系の上着と黒ズボン）も施設で洗濯し保管していただくという家族にとってはありがたいサービスだった。

Mさんは、そもそも、質素な生活をしており一般的な人よりも長く大切に衣類や靴、家財道具や日用品などを使いこなす価値観を持っている人である。書道教室に長い間通っていたが、そこで使っている筆は、息子が小学校の時、学校で使っていたものを活用していた。というエピソードからも察しがつく。

衣類に関する執着があり、「帰宅時にはお返しします。」と職員と毎回約束して洗濯していただいていたが、施設利用中も建物の外に干してある洗濯物を心配そうに見に行くこともあったようである。図1は、2017（平成29）年春頃、やっとのことでMさんの着てきた服を筆者の家で洗濯した際、ズボンの下に重ね履きしていたズボンであり相当いたんでいた。

ある時は、Mさんは施設利用中に「針と糸を貸してください」と希望し、自分が履いてきたサンダルの破れた部分を縫っていたこともあったと職員から聞かせてもらう。家族としては恥ずかしいことだが、もうそんなことを考えている段階ではなかった。

2018（平成30）年7月30日、眼科で白内障の手術を受けたため、その後しばらく点眼薬が2種類処方された。1日4回、左右の目に点眼することが必要となり本人では管理できない。長男が表を作成し点眼時間を定め施設職員に点眼を依頼した。その関係もあり本



図1 Mさんがズボンの下に重ね履きしていた古びた衣類

人も目のことは気にしていたため8月は1ヶ月の利用が27日間に増えた。土日も含めほぼ毎日利用した。9月はその疲れが出たのか10日間の利用となった。それでも利用開始の頃に期待していた日数を遥かに上回る利用ができるようになった。この頃はデイサービスセンターを利用してない日に知らないうちに自転車で転んでいて、肩や膝に内出血があるのを後日職員に見つけてもらい受診したこともある。また、この施設は、介護学生を始め看護学生や教員免許取得予定者の介護体験など実習生が多い。10月末、デイサービスセンターの管理者から「Mさんは教員免許取得予定者に対ししっかりと指導をしてくれている」と聞かせていただき、長年の職業経験を活かし語れる場があることは大変刺激になりMさんにとって良い環境だと思った。この頃は徐々に身体は弱ってきているが、利用回数が自然と増えてきて見守っていただけていることが家族にとっては安心感があり、本人も在宅生活が継続できているという実感があるので、できるだけ通所介護の継続を希望した。

2018年11月(Mさん86歳)のデイサービスセンター利用は24日間だった。11月15日自宅の近くにある老人福祉センターから連絡が入り、カラオケに来ていた際、ふらついて倒れその時は意識が朦朧としていたため救急車を呼んでもらったが約10分後救急車が到着した時は受け答えもでき、本人が病院に行くことを拒否して所長さんに家まで送り届けてもらっている。この日はデイサービスセンター職員から午前午後2度ほど電話でやりとりしてもらっており、利用のお断りも確認してもらい安否確認できている。Mさんは翌日、施設の職員には「昨日は県庁に健診に行った」とか「確定申告に行った」とか話しており(たぶん本当ではない)倒れたことは都合が悪いのか口にしなかったようであった。

2019(平成31)年2月の介護認定更新時には「要介護3」になっていた。2019(令和元)年8月6日、朝からテレビで広島原爆記念式典を観て勘違いしたのか、デイサービスセンターHに到着するとMさんは「私の戦争体験を学生さんに話さなければならない」と緊張が高まり、かなり興奮気味であった。たぶん、過去に戦争体験を語る機会があったことを思い出し混乱したのであろう。ちょうどこの日、筆者が施設体験ツアーで学生と高校生を連れてH施設に伺っていた。施設相談員から「Mさんが話す機会を設けないと気持ちの収まりがつかないといった勢いだ」と、どのタイミングでその場を設けようかと相談があり、急遽計画を練った。ところが、当のMさんは学生たちと口腔体操をして昼ご飯を食べ終わると落ち着いてウトウトと居眠りしだし、話す機会を設けずとも済んだというエピソードもあった。2019年は1ヶ月平均利用日数が約15日、2020年に入ると多い月は25日少なくとも19日ほど利用している。それも、朝から電話をもらおうと「今日は用事があるので行きません」と強い口調で断ったかと思いきや5~10分後に自分から施設に電話を入れ「やっぱり行きます」といった具合で施設をかき回すようなやりとりが何度もあるなか、職員はうまく対応してくださり粘り強くかわり続けてくれたことでこの日数の利用につながられていった。

2020(令和2)年7月9日(Mさん88歳)、珍しくMさんから朝、筆者の家に電話が入

り「デイサービス H から電話がかかってきて『仕事がないので来てもらわなくてもいい』と言われて傷ついた」という内容だった。私が「H 施設はそんなことを言わないと思うよ」と言ったが、「今断られたばかりなのに私（M さん）からは電話しにくい、C さん（筆者）から電話して断られたことには触れずにボランティアに行っただけで良いかどうか確かめてほしい」と頼まれた。筆者が施設職員に事情を尋ねると、「いつも来園するなり『仕事！仕事！』と M さんが言うため他の利用者も落ち着かないし職員もまだ来たばかりなので、洗濯物が出来上がってくるくらいに仕事をしてもらったらどうでしょう」というような内容の話を電話でしたら、M さん側から突然ガシャンと電話を切られたようだった。納得できる話だった。M さんはずっと前から自分が言いたいことだけ言うと人の話は聞かず電話を切る人だった。そのあと M さんから私に電話があり「H 施設から電話があつて、私（職員）はそんなこと（来てもらわなくてもよいということ）は言っていないと話してきたので、私（M さん）が下手に出て『私（M さん）が聞き間違えましたのですみません。来週からまた行かせてもらいます』と答えた」との M さんなりの説明があつた。認知症がこれだけ進んでいてもプライドの高さは変わらないと感じられた。結局、その日はお迎えにきていただき利用につながった。施設職員には頭が下がる思いである。M さんは「H 施設から望まれてボランティアに来てあげている。H 施設から頼まれたから行くのであって、こちらから行きたいということをはっきりと立場が逆転する」と思っているようであった。職員がその M さんの思いを尊重して粘り強くかわかってくださっている一例である。このようなエピソードはいくつもあつたに違いない。おかげで家族の望む利用が実現できていた。

2020（令和 2）年 10 月 30 日、デイサービス利用時体調不良となりかかりつけ医に受診する。39.7℃、嘔吐、下痢、SpO₂：90～92 で M 中央病院に救急搬送され入院となる。14 日後、退院するまでコロナ禍だったので家族の面会はできないのが基本だった。しかし、M さんは「帰りたい」と言い相当看護師を困らせたため、特別長男の面会を病院から求められ 3 回ほど面会し話し相手をした。その後、H 施設のショートステイを 11 日間利用させていただいた。その間、ケース会議を開いていただき本人の要望、家族の思いを確認していただく。その後在宅に戻り、再びデイサービスセンター H をほぼ毎日利用する。

11 月 25 日、お迎えに行っていた際、施設職員から自宅内が焦げ臭い上、台所のシンクに焦げた鍋があつたと連絡が入る。長男に M さんの自宅に向かってもらい状況確認した。火事を起こさないためにガスを止めて利用しないこととした。その後、IH のコンロを購入し、本人に使い方を説明した。そもそも電気製品の使い方が理解できない M さんにとっては過酷なことだったが、貼り紙など工夫して何度も伝えると IH を使い湯沸かし、餅を切って汁を作るなどちょっとした料理はできるようになった。

2020 年 12 月 1 日、警察署から電話が入り、M さんが片側 3 車線の国道を自転車で逆走しているという住民からの通報で保護したということだった。自転車をその辺りのお店で預かってもらい、本人を家まで送り届けてもらうように丁寧をお願いした。たぶん自分が

氏子である神社に行きたかったのだらうと推測する。この日は長男（筆者の夫）が修学旅行の付き添いで離れたところに居て私も仕事で動けなかった。このことが起こった後も、本人に出来事をたずねるが、本当に覚えていないのか、都合が悪いので忘れたふりをしているのか、はっきり答えなかった。長男から「警察に注意を受けた。危ないから自転車を没収された。」と本人にうその説明をして、古い自転車を処分した。1月11日に警察署に本人が実際にはその場のない自転車を受け取る目的で出向いたために、警察から長男に連絡が入りMさんを引き取りにいくという出来事が起こったが、その後はあきらめたのか、自転車のことは触れなくなった。市役所内にある徘徊SOSネットワークで登録すると良いとの助言を警察から受けた。筆者たちからみたらMさんは徘徊ではなく目的のある行動であった。12月のデイサービスセンター利用日数は26日だった。

2021（令和3）年に入るとほぼ毎日H施設を利用し、病院に通院したあとも長男がHへ送っていくという形で10月末までは土日もすべて全日利用させていただいた。本人はボランティアという意識を持ち続け「できることは何でもやらせてください」と言い、ウトウト居眠りしたり横になったりして過ごすことが増えてきたようだったが家族としては安心だった。9月にはSpO2が低くなり在宅酸素を自宅に置いた。施設にも持って行って数値によって使用させてもらった。足の浮腫が目立ってきて利尿剤を処方してもらおうが食欲不振になったりするため、かかりつけ医に相談し調整してもらい施設で管理してもらった。膝や腰の痛みを訴えることもあり処方してもらっている湿布や塗り薬で対応してもらった。

2021（令和3）年11月16日（Mさん89歳）、朝早く「テレビがおかしいので直してもらわないとH施設にいけない」と泣き声で電話が入る。消えていても「音がしている」と言い、自宅に向かっている間も一旦帰りかけてからも複数回電話が入る。幻聴だろうか。9月頃にも同じようなことがあった。11月18日、施設での食事が一口大の刻み食でもモゴモゴ食べにくそうで、最近は嚙む回数が減って水で流し込むように食べる姿が見受けられると報告いただく。その深夜「息がえらい」と本人から電話があった。長男は飲酒してしまっていたので自動車を使用せずMさん宅へ向かい結局救急車を呼んでT病院に行くが入院はさせてもらえず自宅に戻り19日朝かかりつけ医で検査した。その後デイサービスHへ向かう。11月20日から4日間F施設のショートステイに行く。11月24日（水）、朝6：20頃に電話があり日曜日の夕方と勘違いして「国際交流に行きたいが、足が痛くて歩けやんで息子に送って行ってほしい」と情けない声で息子に話してくる。今日は水曜日だと何度も言うやと通じたのか「何や水曜日か…」と声の調子が変わりプツツと電話を切った。その後この日もH施設を利用する。最期まで実際には行っていないでも国際交流でのボランティアに生きがいを感じていたようであった。その2日後、2021（令和3）年11月26日、F施設のショートステイに行く予定の朝、自宅で亡くなっていた。第一発見者は長男だった。89歳だった。

4. 考察

89年の生涯を生きたMさんの晩年をできる限り時系列で筆者目線で軌跡をたどった。筆者もフルで仕事をしていた関係で、Mさんに関する記憶が曖昧なところもあったが、筆者のスケジュール帳やH施設との連絡ノート等さまざまな記録物をたどることで、改めて振り返り再確認できた。Mさんの価値観、考え方は一貫していてブレはない。ある意味わかりやすいが、妥協しないところやどれだけ話しても理解してもらえない虚しさは、認知症になる前から顕著だった。子どもの育て方の価値観も独特なものがあり、言い尽くせないほどお世話になったが腹の立つことやモヤモヤすることも多くあった。しかし、筆者もこの歳になり自分の人生を振り返るとき、Mさんの存在がなければ今の自分はなかったと思えるほど仕事を継続するうえで助けていただき感謝している。認知症があることにより、適切な判断ができず、その時々で罵声を浴びせたりするMさんに対し、広い心でしっかり受け止めてくれる施設職員の対応はプロフェッショナルであった。Mさんを施設利用につなげるための声かけ等に熱意と優しさがあった。施設で利用者や職員とともに活動的に過ごせた日々はMさんが本来望んでいた生活ではなかったかもしれない。しかし、Mさんは幸せだったと言いたい。誕生会の日、楽しそうな笑顔で筆者の教え子でもある職員と一緒に写っている穏やかな写真を見ると、デイサービスセンターHと出会えたことはMさんにとっても家族にとっても良かったと思う。この施設との出会いがなければ、Mさんは親から譲り受けた大切な自宅に住み続け守っていくという思いは叶えられなかった。また、筆者たち家族も仕事の継続が困難になったかもしれない。長男はMさんの晩年3年間ほどは第一線を退いていたため割と時間が捻出できたが、デイサービスセンターHを利用していなければ精神的にも肉体的にも限界がきていたのではないかと思われる。

早期発見、早期治療は理想ではあるが、本人自身に困り感がない場合、どのようにして病院受診につなげるかは認知症のある人の家族にとって大きな課題である。また、Mさんの場合、年金をそれなりに受給していたため介護保険制度の限度額が超過しても自費を支払うことで、毎日通所介護サービスを受け続けることができた。しかし、そうでなければ経済的理由でサービスを継続できないケースも想定される。社会資源のなかでもフォーマルで安価なサービスには制限がある。インフォーマルな自由度の高いさまざまなサービスが登場することが今後求められる。デイサービスセンターHは、認知症対応型の通所介護であったが本人の意向、家族の意向を丁寧に受け止めてくれて決められた枠の範囲内でできる限りのことをしてくれた。私たち家族側も無理を承知でさまざまな依頼をした。家族側はどうしても思っていることを言いにくい立場であることが一般的であると思われる。筆者とH施設は以前から仕事上の関係性が構築されている施設だけに、遠慮せずに様々な提案をさせてもらえ、意思疎通が図りやすいことが何より助かった。その具体例として、ひとり暮らしのMさんは、大切な自宅から「お迎え」で出かける際は玄関の鍵をかけたあと、お隣のビルの敷地を通らせていただき自宅の裏にまわり裏の門扉が閉まっているか必ず

確認に行く。その時間、待つていただくことは朝のお迎えの忙しい時間帯に余分な時間をとっていただくことである。だが、その余分な時間を「お迎え」の職員は大切にしてくれた。そういったきめ細かな接遇サービスがMさんと施設職員との信頼関係や絆になっていただろうし、私たち家族にとってもありがたいサービスだった。

筆者の夫は、Mさんの長男であり一生懸命まっすぐ母親とかかわった。筆者はMさんに対して思ったことはできるだけ口に出して夫ともMさんとも話し合い、妥協点を見いだせるように努力したつもりだ。無視したり無関心になったりすることだけは避けようと心がけて向き合った。Mさん側はどう感じていたのかわからないが、それぞれが日々精一杯だったと感じている。Mさんが自宅で暮らし続けられたのは、Mさんの状況を理解し、おおらかに見守りかかわってくださったご近所をはじめ地域の方々、国際交流団体の方、老人福祉センターの方、書道教室や老人会の方々など、そして、いろいろと相談に乗っていただいたケアマネジャーやデイサービスセンターHの職員の皆さん、たくさんの方々の支えがあったからだといえる。活用できる社会資源を意識してつなげることが重要だ。

おわりに

今後、ますます認知症のある人が増えてくる。2025年12月厚生労働省は臨時で介護報酬を改定すると発表した。3年に1回の介護報酬改定は次回27年度に行われる予定だが、長引く物価高騰などの影響も踏まえ、政府は26年度にも臨時で改定する方針を示した。また、25年度補正予算案には、25年12月から26年5月までの半年にわたり介護職員やケアマネジャーらを対象に、要件付きで賃金を月1万円引き上げることが盛り込まれた。このように介護職員の賃金のアップも徐々に期待できる。社会資源として質の高い介護従事者は重要だ。

認知症のある人々やその家族ができる限りその人らしく生活できる環境が充実していくことを望む。筆者自身も今後さらに社会貢献したいと考える。

本実践報告を公表するにあたり、快諾していただいた関係親族および熱心にかかわってくださったケアマネジャー、デイサービスセンターHの職員の皆様に厚く感謝します。

引用・参考文献

1. 諏訪茂樹編、大谷佳子著（2007）「利用者とうまくかかわるコミュニケーションの基本」中央法規出版
2. 中川千代（2021）「留学生に対する情報伝達の現状と課題～報告・連絡・相談のあり方～」高田短期大学介護・福祉研究第7号
3. 中川千代（2022）「『価値交流学習』から見えてきた『対話』的な学び～多様な価値観への気づきの醸成～」高田短期大学介護・福祉研究第8号
4. 「脳の健康みえる手帳（三重県認知症連携パス）」基幹型認知症疾患医療センター（三重大学医学部附属病院内）、公益社団法人三重県医師会、三重県、2017年9月発行

